全員ズルムケ！

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
全員ズルムケ！

【Ｎコード】
Ｎ６６６２Ｔ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
　羞恥心のあまり入浴マナーが乱れていることの対策として、修学旅行前の中学生たちが、包茎手術を受けてみんなズルムケにされてしまう物語。ちょっと作者の願望も入っています。

イマドキの中高生

近頃の中学生・高校生ときたら温室育ちのせいか、裸を見せることにあまりに抵抗がある。銭湯なんて行ったことないという彼らは、子どもの頃から他人と一緒に入浴する機会が乏しい。水泳の着替えだってひも付きのタオルでしっかり隠した上で着替えたり、中にはわざわざトイレに行って着替える奴もいる。他人の性器を見たことがない状態で思春期を迎える。

そうなると修学旅行の入浴は大変だ。パンツの中にタオルを入れてしっかりガードした上で脱ぐのだ。そのまま洗い場に行き、完全にガードしたままで体を洗う。その状態で浴槽にもつかろうとするような奴もいる。タオルを浴槽につけないように指導されれば、体を洗うだけで浴槽にはつからない。シャワーがあればガードしたまま浴びるだけ。脱衣所に戻ってきてもタオルを絞ることなく、フェイスタオルの更に上からバスタオルを巻き、腰をふってフェイルタオルを落とす。腰にまいた状態で下半身をふきおえると中からパンツをいれ、決して見られることないまま着衣する。

そんな彼らの心境は、大人にはなかなか理解できない。修学旅行を偵察に来た文部科学省の役人たちは愕然とした。昔は外で並んで小便をし、田舎ならば裸で川に入るなど当たり前だった。風呂のない家庭もあり、皆が銭湯で汗を流したものだ。着替えの時は互いのものを見て比べたりした。それに比べると今時の若者は何と情けないと思うのだ。隣の韓国では皆隠すことなく銭湯に入っているではないか。これでは国際社会の中で取り残されるだけだ、と感じた。

その時、1人の役員が提案した。「互いの形がわからないから隠すんでしょう。だったら皆、同じ形にしてしまえばよいじゃないですか。実際、韓国では子どものうちに皆手術を受けます。だから裸を他人に見られることにも抵抗がないんでしょ」それを聞いたほかの役人も皆同意した。この際、中学生の男子に包茎手術を施して全員ズルムケにしてしまおうと話がまとまった。そうはいっても全員に強要することは反発も予想される。手段も難しい。それならば、自主的に受けられる環境を作ればいいのだ。

まずやるべきことは医師会にいい思いをさせ、「包茎は中学生のうちに治しておいた方が良い」と推奨させることだ。つい先日まで「包茎は病気ではない」といっていた医師たちが、「様々な病気の原因ともなります。発育不良につながる可能性もあります」「修学旅行の前に格好いい大人の男になりましょう」と一斉に喋りだした。そして①中学2年の冬休み　②中学2年の春休み　③中学3年の5月連休　の3つの期間において、学生証を提示すれば包茎手術は完全無料とした。公立の中学校では学校ごとに申し込みが出来るようになった。それぞれの期間の中から1日、学校ごとに割り振られた日がある。学校に手術を申し込めば、学校が指定の病院に引率し、一斉に手術を施すのだ。

中学2年生の2学期

〇〇年、中学生が無償で包茎手術を受けられる制度が確立した。最初の機会は中学2年生の冬休みである。出来るだけ多くの中学生を早いうちにズルムケにしてしまいたい学校側は様々な手段で希望者を増やすよう画策した。

まずは保健体育の時間を利用した包茎のデメリット解説である。中学校2年生の授業で10月頃に扱うこととした。あからさまにやれば反発も大きい。だから自然な教育の流れの中で行わねばならない。従ってテーマは「男性と女性の生殖器について」としてあり、男女ともにそれぞれの体つきを学ぶ。男性生殖器の勉強の中で、包皮の存在について話をする。すなわち幼少期は保護のために覆われているが成長と共に不要になってくることを力説した。更に包皮が被っていることで病気になりやすく、成長も妨げると断言し、更に女性に感染させる可能性があること、独特の異臭を放つことなどを細かく説明した。そうすることによって女子生徒にも包茎は悪だというイメージを受け付けることが目的なのである。

そして直後に保護者会が開き、概要を保健教諭が説明した。その上で①今ならば無償で手術をしてもらえること②学校から申し込めば教師が引率した上で集団で受けられること
を強調した上で、申込用紙を配布した。保護者の中には息子の性器の状況を確認することもなく即座に申込書を提出した者もいる。本人の署名欄はなく、保護者の同意があれば、受けさせることが出来るのだ。

保護者会後、男子の保護者たちの間に反響が広がった。家に帰って家族会議を開く家もあれば、親が一方的に受けさせると決めた家もある。実際にパンツを脱がせて性器の確認をした親もいた。親同士の情報交換も行われた。生徒の間でも同様である。互いの性器について相談したり中には見せ合って検討する生徒もいた。これだけがんじがらめにされてしまえば、包茎のままずっと通すことは難しい。手術を受けるか、あるいは自分で剥くかの二択しかなくなっていくのだ。

今回は初回ということで、それほど需要は伸びなかった。既にズルムケになっている者も20人に1人くらいはいる。更に剥け始めているものも数人はおり、彼らは今後の改善を期待して手術を回避した。完全に被っている者の中でも、まずは努力で剥けたいと思う者、手術だけは嫌だと拒否した者、家庭内協議の結果来年に持ち越した者、冬休みということで予定が入っている者・・・事情はそれぞれだった。20人程度男子がいるクラスでは、3~5名の男子が手術を受けることになった。

彼らは冬休み中の一日、体操着で学校に集合する。そこから教諭に引率され、マイクロバスで指定の病院まで向かう。これから待ち受けている手術を前に、バスの中で生徒たちの表情は固い。特に自分の意思より親の意思で受けさせられる者は、不安な顔つきで病院への時間を過ごしていた。その時間は学校の貸切である。番号順に次々と手術スペースに入っていく。その場でパンツとズボンを脱ぎ、下半身裸になる。

最初にされることは除毛である。中学2年生ともなれば相当生えそろっている子が大半である。その陰毛を看護師たちはバリカンで容赦なくそり落とす。そして次に全体を消毒される。看護師はまだ若い女性が多い。それだけで思春期の男子たちは緊張して勃起してしまう者も少なくない。しかし性的興奮は一瞬だけのこと、すぐ手術の恐怖に戻される。いくら簡易な手術とはいえ、メスを体に入れる。まして場所は最も敏感で大切な場所だ。緊張するなという方が無理な相談である。

準備が終わると医師がやってきて、細い麻酔針を打ち込む。痛さで顔をしかめる生徒も多い。そして麻酔がきいたことを確認すると、ハンドメスで余っている包皮を切り取る。手術が終わると縫合し、再び消毒してからガーゼで保護する。男の子たちは顔をしかめてゆっくりパンツとジャージを履き、再びバスにのって学校へと戻っていく。冬休みだから学校には僅かな生徒と教員しかいない。しかしバスから降りてくる男子生徒が何を今までしてきたか、全員が知っている。

彼らは確かな鈍い痛みを伴いながら、確かに大人に一歩近づいた。彼らのパンツの中にあるのは亀頭が全露出したズルムケのペニスだ。傷が完全に癒える頃には毛も生え揃い、すっかり大人の性器になっているはずだ。

中学2年生の3学期

中学2年生の冬休み、各クラス数人の男子が集団で病院に行き、包皮除去の手術を受けた。自分の意思で受けたものもいれば親が主導したものもいる。結果として彼らは、包皮に覆われていない亀頭を得たのである。

彼らは3学期、クラスのヒーローだった。誰が手術を受けたかは一応伏せられていたが、クラスメイトは皆知っていた。手術を受けたものの周囲にはクラスメイトが集まり、彼らは「麻酔の注射がチクリとした」「こすれて痛かった」などと体験を語るのだった。

3学期は日数が短い。あっという間に1月が終わり、2月も大半が過ぎた。中学校3年生の進路がほぼ確定し、卒業式が近づいてきた2月末、中学2年生の保護者会が再び開かれた。この時も「集団包茎手術申込書」なるものが配布された。中学3年生になると性器検査なるものが実施されて全員包皮の状態を確認されることが説明され、冬休みに手術を受けた生徒の体験談も述べられる。中学3年で受験勉強が本格化するのを前に済ませておきたいと思う親も少なからずおり、今回も親主導で書かれた申込書があった。

かくしてクラス数名の男子が、春休みに手術を受けることとなった。自分の意思で手術を決断したものでも当然ながら不安がある。手術経験者に話を聞き、特にこれまで亀頭が刺激に慣れていないものは自分で剥いてみるなど術後に備えた。これを機にトランクスへ

完全移行したものもいる。

春休み初日、マイクロバスが学校にやってきて、体操着姿の中学2年生を乗せて病院へと走る。行きは不安で、帰りは痛みで、それぞれ股間に手をあてる姿が印象的である。今回も手術を申し込まなかったのは「既に剥けている」「剥けてきそうだ」「どうしても手術は嫌だ」「子どもが可愛そうだと親が擁護している」などのケースである。まだ亀頭に皮が覆っている生徒たちは中3になって早々、大きな試練とぶつかることになる。

中学3年生の1学期

4月に健康診断があるのはどの地域のどの学校でも、毎年恒例のことである。しかし、今年からは一部の生徒に新しい検査項目が加わっている。それが「性器検査」なるものである。対象は中学3年生の男子のみである。パーテーションで仕切られた内科検診の際、一緒に行われる。体操着の下とパンツを医師の前でおろして、下半身丸出しの状態で直立不動の姿勢をとらされる。

中学2年生の冬と春に学校がとりまとめて実施した包茎手術を受けたものは、検査項目の欄に「手術済み」という印が既におされており、この屈辱的な検査は免除される。個人で手術を受けた場合も病院からの診断書を出せば免除となる。精神と肉体の痛みに耐え手術を受けたものだけが免除されるのだ。

この性器検査で問題なしと診断されれば、「検査合格」の印が押される。高校に進学する際、性器発育の項目が「手術済み」か「検査合格」になっていなければ入学は認められない。思春期の少年たちにとっては大きな精神的苦痛である。個人で手術を受けた中にはズルムケとはなっていないものもいる。手術を受けてさえいれば検査も免除になるため、包皮の先端を少し切っただけで亀頭の半分は覆われたままという生徒も中にはいる。ただし学校指定の病院では基本的に亀頭が全露出している状態にしており、今後の成長や勃起時を考え、根本の部分に皮が多少余るような処置をしていた。

内科検診を担当するうち、性器検査も行う医師は予め決められている。手術済み以外の生徒は、全員がそちらの列に並ぶ。2回の手

術機会があり、男子生徒のうち半分くらいは既に手術を受けた。残りは自力で剥いたもの、自然に剥けていたもの、そしてまだかぶっているものである。

どうしても手術が嫌だというものは、頑張って剥き癖をつけようとした。恥を忍んで親に頼み、矯正器具を買ってもらった生徒もいる。剥けてさえいえば、一時の恥ずかしさで済むのだ。パンツを脱いで数十秒間、剥けた状態を保てていれば解放されるはずだ。もちろん目の前で剥こうなどとしたら見つかってしまう。剥き癖をつけてきたものは内科検診の前にトイレに行き、個室でこっそりと剥いた。そして脱着の際に巻き込まないよう、細心の注意を払った。

検査では自らズボンとパンツを下げさせられ、医師にペニスをつかまれる。背面・腹面両方をチェックされ、垢などがたまっていないかどうか確認される。問題がなければ検査項目欄に印を押してもらい再び着衣する。剥き癖をつけたつもりでも脱ぐときや触られた時に戻ってしまう場合がある。この場合は当然不合格となる。

検査で不合格となった生徒、すなわちまだ皮が被ったままの生徒はこのあと、体育館に移動する。検査を免除されたものと合格したものは教室にもどってホームルームになるので、誰が不合格になったのか、クラスメイトは皆知っている。体育館ではまず医師から、なぜ剥けていなければならないのかを説明され、早急に治療をすることが求められる。

その後、試練の時間が待っている。全員その場で下半身裸となり、体育館の床に仰向けで寝なければならない。当然クラスメイトや付き添い教師に丸見えである。等間隔でマグロのように寝かされた生徒の間を、数人の医師がまわる。亀頭の半分近くが見えていてもうすぐ剥けそうなもの、すっぽり被っているもの、そして余りがある

ものまで形は千差万別だ。医師は一人ひとりのペニスをつかむと、力を入れて剥いてしまう。これまで剥くことすらしていなかった生徒は悲鳴をあげて痛がる。いつも剥く練習をしている生徒ですら、力をいれて剥きあげられることと環境で痛みを感じる。肉体的にも精神的にも厳しい仕打ちだ。中には癒着を金属製の器具でひきはがされたり、入り口を広げる処置を強制的にされる生徒もいる。

その間、教師たちの手によって書類が作られている。「お子様は包茎の状態であり、衛生面・発育面を考えたときに至急治療が必要です」と書かれた医師の署名入りの文書が保護者向けに作成される。そしてその中には5月の連休前日に学校単位でもう一度、無償で手術する機会を与えるので受けるように促す文言も入っている。

各自、家に持ち帰り、恥ずかしい文書を親に見せねばならない。1週間後までに指定日に学校単位で手術を受けるかどうかを明記して返答を出さなければならない。返答を出さなければ親に直接電話が行くことになり、恥ずかしさはさらに増す。ここで手術を受けなかった場合、修学旅行前に再度検査を受けることになる。その時に包皮が被っていれば強制的に手術を受けさせられてしまう。結果としてここに残された半分以上の生徒は、学校単位の手術を受けることになる。

これまで自然治癒を信じたり手術を回避しようとしてきたものも諦めて手術を受けることが多い。ここに至ってまだ経過観察を選ぶものは20人に1人か2人である。その中には親の知り合いなどに手術してもらって報告書を出すものや亀頭が半分くらい露出している軽度仮性包茎のものもいる。皮が被ったままで残りの中学生活を送るものはほとんどいない。5月連休前に複数の学校の生徒が指定の病院に集まり、包皮を取り除く手術が行われた。彼らは同級生か

ら少し遅れ、ズルムケになった。

中学3年生の2学期

中学3年生の修学旅行前に亀頭が露出していた状態になることが実質上義務づけられ、指定期間中の包茎手術が無償化されたこともあり大半の生徒がズルムケとなっていた。特に学校単位で行われた中学2年の冬休み／春休みと中学3年生の5月連休前という合計3回の集団手術に男子生徒の約半数は参加した。中学3年生の夏休みになってまだ検査に合格していない生徒はクラスの中でも数名しかいない。

春に行われた身体検査の際、包茎検査も行われ、そこで合格できなかった生徒の半分は5月連休前に病院で手術を受けた。受けなかったもののうち、ある程度剥けている状態だったものは夏休みの間、必死になって剥けた状態をキープできるように努力した。検査の時に剥けた状態をキープできていれば、皮を切らなくても済む。中学2年生の冬休み前に手術することなくズルムケになっていた生徒もクラスに1~2名はおり、それから半年の間に剥く訓練を重ねた生徒もいた。まだ剥けきらないものは夏休みが終わるまでに必死に剥いた。自分ではどうしようもなく、5月連休や夏休みに親と病院に行き、有償で手術を受けてきたものもいる。彼らは手術済みの証明書を提出することで秋の検査は免れた。

2学期早々、未だ不合格の者の検査が行われた。この検査を受けなければならないのはクラスメイトの5%程度である。他のものは既に「手術済み」か「検査合格」の印をおしてもらっていた。少人

数のため、検査は授業中に呼び出される形で行われる。不合格者であることは女子生徒にも完全にわかってしまう。名前が呼ばれた生徒は保健室へと呼び出される。

1人ずつ検査をされる。自分で剥いてきたものはその場で剥けていることが確認できれば印をおしてもらえる。この検査に及んでも包皮に覆われたペニスを出したものは強制治療の対象となる。その場で医師が力を込めて包皮を剥き、戻せない状態にしようと試みる。癒着などは既に春の検査ではがされているが、毎日の訓練を怠った結果再び癒着しているものもいる。そういう場合は器具で容赦なく強引に剥かれる。これでキープすることができるようになれば、手術は免れる。経過観察が必要な場合は翌週に再度、キープできているかどうかを確認し、合否が通達される。

どうにも剥いた状態をキープできないものに対しては学校長の名前で手術通達書が出される。保護者が学校に呼ばれ、手術同意書にサインを求められる。中には手術に難色をしめる保護者もいるが、右に倣えの日本にあって、学年で1人や2人だけの剥けていない状態で過ごすことはきわめて難しい。親としても世間体があるから、結局は受け入れて手術をすることになる。期限内に指定の病院へ行き、包皮を切ってもらわなければならない。最後まで抵抗したとしても、結局は亀頭を露出させられてしまう。こうして中学校の修学旅行は男子生徒全員がズルムケでのぞむことになるのであった。

本来、小学生のうちから自分で剥く訓練をしていれば皮を切ることなく亀頭が露出した状態になることができる。年数が経ち、この制度が浸透して行くにつれて男子生徒達も自分でズルムケになる努力をするようになり、手術を受ける生徒は極端に減っていった。中学1年生の段階で学校でも包皮を剥くことを教えるようになり、それは小学生へと順次浸透していく。

初年度ということで手術による亀頭露出が６０％を越えたが数年後には２０％程度に減っていった。この制度が導入されてから、男子中学生は程度の差はあれ痛みに耐えるという経験をすることになる。通過儀礼が形骸化した今日、ひ弱な草食系男子が増殖した。この制度は男子の脆弱さを改善することに少なからず役立ち、文字通り一皮剥けた男として日本の近未来を切り開いていくことになる。

中学3年生の2学期（後書き）

個人的にはこの制度は是非導入して欲しいと思っています。強制的にというのはやや問題もあり、そこはフィクションゆえでありますが、少なくとも促しはして欲しいです。手術しても良いと思う男子が気兼ねなく受けられるように、行政も配慮して欲しいという願いを筆者は持っています。